

# 砂あそび雑感



村井 トミ

幼稚園における望ましい活動には、いろいろの面があるが、今日はその一つである砂あそびを拾ってみようと思う。

「教育ママ」という言葉が、はやっているが、果してこれは、ママだけのことであろうか？ と時々考えさせられることがある。子どもを教育しようと熱心になるあまりに「教育先生」があらわれるのではないかと……。

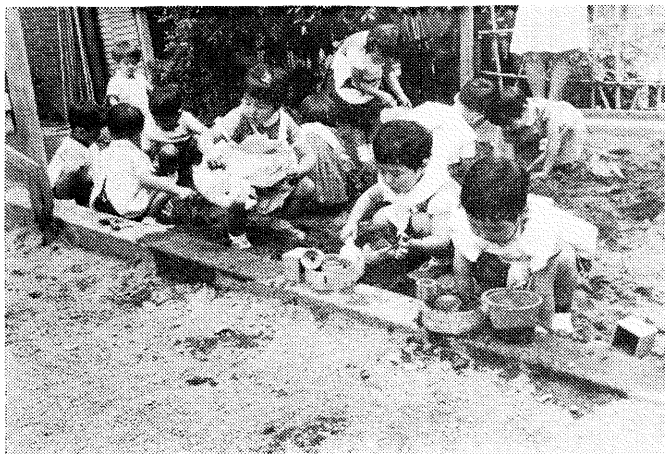
子どもが無心に砂あそびをしている姿をみて、ほほえまない人はいない。しかし砂あそびなどは、戸外で勝手にあそんでいる活動の一つであって、その他の製作活動や言語活動、音楽リズムなどの活動にくらべて、あまり重要視されていないのではないかと思われるのである。

だから、子どもたちが今、ここであそびの絶頂であろうと、(例えば今、トンネルが完成して水を通そうとしている時でも)無情にも平気でお集まりと呼び集められて、他の活動を強制されることになるのではなからうか。テレビなどの場合には、テレビの方が待っていてはくれないので、やむを得ないこともあるが、それだけに他の場合はよく子どものあそびを観察して、先生の心の中の計画も適当に前後しなければならぬであろう。

ただ、あそんでいるように見える砂あそびが、製作活動にも社会性にも、健康にも、自然にも——、そしてそこで行なわれる努力、工夫、創意、協同、協調、などに連なっていくことを、もういちど、見なおしてみたいと思うのである。

まず三歳の入園当初の頃を考えてみても、大部分の子どもが、何の抵抗もなく砂場に集まる。いろいろの形の砂型や、赤や黄のきれいな小さいバケツ、おしゃもじ、汽車や電車になる丸太、ふるい、ます、などなどにつられて自然に入ってくる。入園当初はブランコがこわかったり、すべり台もこわい子もある。だが砂は自分の思うままになつてくれるので安定感があるのだろうか。お茶わんの中に少しぬれた砂を入れてボンと返すと、きれいなおまんじゅうができていく。いかにも満足そうである。いくつもいくつも並べて相当の時間あそんでいる。

ひとりひとりがごちそうづくりに夢中



「くださな」「ハイどれがいいですか」

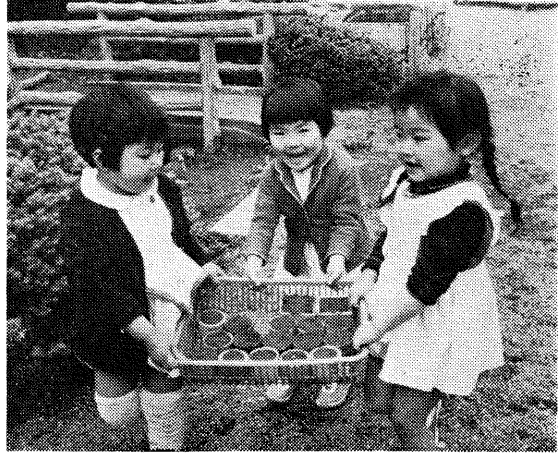


砂に水を入れてかきまわす、かげんも魅力らしい。ぬらしてはかきまわし、おかまだとか、おなべだとかいいながらまぜる。こねた砂は、アンコになったり、アイスクリームになったり、おとうふになったりする。乾いた砂はお砂糖になりメリケン粉になる。ぬれた砂を固くまるめ、次に乾いた砂をまるめ、またぬれた砂をつけ、こ

れをくり返して、かたいかたいまるいまるいおだんごをつくる。すべてのことを忘れて——先生も友だちもない、何の強制もない、砂と自分だけの世界だな——とみとれることである。  
—できたおだんごは砂場のふちに、ずらりと並べて、先生に食べてもらうのをよろこぶ。先生はよろこんでおいしそうに食べて、こんどはアイスクリームを、今度は玉子やきをと注文する。「ハイ、ちよっとおまち下さい」と、彼ら、彼女らは生き生きとして夢中でつくる。

ごく一部の幼児であるが、あまり清潔ママに育てられてか、砂などに手をふれない子が、たまにいる。また「ママに、洋服よごすと叱られるの」という子が一クラスに一人、二人は大抵いる。実になさけない親だと思いが、この子どもたちの手を引いて、私はおだんごなどを買う人になる。落ちている花びらや、葉っぱをお金にして「おだんご下さいな」と買いにいく。こうして何度も何度も同じことをくり返す。面倒がらずに、あっちこち引っぱ

「おまんじゅうはいかが」「ケーキはいかが」



てはいられない。ブランコにも、すべり台にも、ままごともと、方々見なければならぬ。今でも思い出すのだが、私がブランコなどを押していると遠くの砂場からバケツに砂をいっぱいつめて、小石をお豆にして上にたたくさんのせて、ヨチヨチと「むらいちえんちえい、どーこ？」と庭にいらした他の先生にたずねながら、やっどブランコにいる私をみつけ、砂のケーキを食べさせにきたKちゃんたちの腰つきが忘れられない。

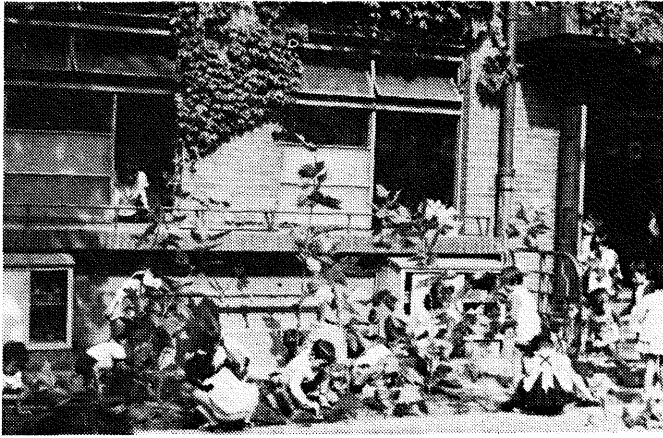
りだこで、買ったり食べたりしている中に、手を引いていた子どもたちも次第にてのひらに、おだんごをのせてもらったりして、にっこり笑う。しめしめと、こちらもほっとする。

先生は砂あそびばかりについ

「もっとたかくしようよ」「かたお山にしようね」



植木屋さんの切りおとした木の枝でお山づくり、本当の山みたい



ほら、そこをもっとほらなくちゃー、こっちへつなげよう



入園当初は砂と自分だけ、自分と先生だけと連なっていた関係も、おだんごやさん、お菓子やさんから次第に、横に友だち関係として広がっていく。ある時はいっしょにとり合わせて、おだんごをつくっていたご縁で、卒業まで仲よしグループとしてでき上がっていく例もあり、庭にゴザをひいて、アイスクリームをきっかけに

ここからままごとに発展していくこともある。四歳児では一人ずつ、砂をいじってはじめるというよりも、はじめから何人かのグループでやりはじめることが多い。はじめは自分たちだけの場を守り、他のグループの進入を恐れているが、次第に自分たちのつくった山と、隣のグループのつくった山とをつなげて、両方からトンネルを通すとか湖を掘る、山をつくるにしても大勢で大きいのをつくるといいうように、規模が大きくなっていく。落ちてくる木の枝や草を植えたり、川に水を流したり、活動が大きくなっていく。

五歳児などをみていると、大勢が、大きな砂場全体をつかかって一つのものをつくるようになってくる。一人一人の工夫から大勢の工夫が集まって、よくこんなことを考えた、感心させられるようなものをつくる。パイプの管やジョウロを埋めて、一方から入れた水を、ジョウロの口から流しだし、次々と上手にうけとめて流れるようにする。次々と流れていくには子どもなり

に、相当工夫し、考えねばならない。砂を低く掘らねば、水は流れてこないし、ふるった砂をつくるには、乾いた砂でない、うまくいかないことも、皆経験している。子どもたちは本当に休全体をつかって没頭している。

先生の方では、洋服の袖をあげたり、ハンカチを引きずらぬよう脇へはさんだりして必要以上に衣服をよごさぬよう気を配ってあげるのだが、それでも泥水がはね返ったり、池に足を入れてしまったり、掘った砂が頭までとんだり——活動が大きくなるほど、被害も大になる。しかし夢中で水を運んで、ダムに、川にと移しているようすをみていると、あまり口やかましくいえない、気持ちになる。

ただし、水道をだしっぱなしにしたり、高い所から水をそいで、皆に泥水をはね返したり、シャベルで人を打ったり、(三歳の時などは、金のシャベルは使わせないで、ご飯の木のしゃもじにしてい)人に迷惑をかけないことだけは固く約束しておく。また、鉄人だとかアトムだとかいって、強いのがとんできて、せっかくつくだごちそうや、山や池や駅やトンネルなどをこわす時などは、子どもの考えちがいしている強さということをよく教えてやらねばならない。

私は保護者会でお母さんたちに、よくいうことであるが、「こんなによごして——と叱らないで下さい。「よくぞこんなによごすほど、あそんでくれた」とよろこんでほしいと……」。

また、室内で先生の傍にあって、何か製作したり、仕事をしたりしているのがいい、と思ひ込んでいられしく、「家の子は、いつも砂あそびやブランコにいて——」と気をもむお母さんたちに、砂あそびもブランコも、他の項目と同じ重さの価値があることをよく話すことである。これらの子どもも一日中、一年中こういう姿ばかりではないのだから……。

何でも器用な早熟した子をつくるのが幼稚園ではない。小学校のように、いくつもの教科があるのちがって、幼稚園は、幼稚園生活全体を、あそびとみて、そのあそびを楽しくするために、製作あり、音楽リズムあり、いろいろの活動が互いに重なり合って行なわれているというように考えたい。

そうなると、何でもないように見える一つ一つのあそびが、いかに重大かということがしみじみ感じさせられる。

それにしても、先生が、いかに子どもの心を汲んで、子どもと一体になって、喜々とあそぶことが大切であるかということを感じる。一見、簡単にみえることであるが、大人が子どもと一体になってあそぶことは、ある意味で大へんなことである。

疲れている日もあり、体の具合のわるい日もある。しかし子どもたちにだけはいきいきとした顔で接し、いっしょに砂を掘り、山をつくり、いっしょに走り、いっしょに踊りつづける気持ちである。